

令和元年度

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

実践報告書

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

目次

○令和元年度 総会及び研修会（講演会） ----- 1

講演題 小児期逆境体験から考える子ども理解のあり方

—全ての児童生徒の安心感を高める学校を目指して—

○令和元年度 部会活動報告 ----- 22

<教科別部会>

- ・国語
- ・社会
- ・算数・数学
- ・理科
- ・音楽
- ・図画工作・美術
- ・体育・保健体育
- ・英語（外国語活動）
- ・技術・家庭

<領域別部会>

- ・総合
- ・道徳
- ・生徒指導
- ・特別活動
- ・情報教育
- ・学校経営
- ・FD

<校園別部会>

- ・幼稚園
- ・中学校

○秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会要項・申し合わせ事項 ----- 48

令和元年度 総会及び研修会

○日 時：令和2年2月19日（水） 15:00～16:45

○会 場：附属小学校はとの子ホール

○進 行：附属幼稚園 小玉雅彦 副園長

出席者数 学部及び大学院教員33名，附属学校園教員84名，合計117名

○次 第

1. 開会あいさつ・講演会講師紹介（附属学校学部共同委員会委員長）

2. 講演会（70分）

演題：小児期逆境体験から考える子ども理解のあり方

—全ての児童生徒の安心感を高める学校を目指して—

講師：教育文化学部 柴田健 教授

◇講師略歴

1988年3月同志社大学文学研究科心理学専攻修士課程修了

その後、法務省東京少年鑑別所に勤務。さらに秋田県中央児童相談所、大館鹿角健康福祉センター（中央児童相談所北支所）、福祉相談センター等の勤務を経て、2003年4月から弘前大学教育学部助教授（のち准教授）、2008年4月から現職。

専門は臨床心理学。公認心理師、臨床心理士。

3. 謝辞・あいさつ（佐藤修司 学部長）

4. 各部会 16:25～16:45

講演概要

演題：小児期逆境体験から考える子ども理解のあり方

—全ての児童生徒の安心感を高める学校を目指して—

講師：教育文化学部 柴田健 教授

概要

近年、トラウマとなる出来事や小児期逆境体験が慢性的な身体疾患や精神健康上の問題を引き起こし、個人や社会に広範囲な影響を及ぼすことが明らかになっている。このような流れを受け、最近注目されるようになったのがトラウマインフォームドケア（TIC）である。トラウマインフォームドケアでは、まず支援する側もされる側もトラウマが人や組織に及ぼす影響について理解し、その上で身体的、感情的、心理的な安全を重視する支援の枠組みを作る。

今回の講演では、トラウマインフォームドケアに基づく児童生徒理解と、教育におけるトラウマインフォームドケア実践であるトラウマセンシティブスクール（TSS）について解説がなされた。

講演内容の詳細については、次頁からの資料のとおりである。

小児期逆境体験から考える 子ども理解のあり方

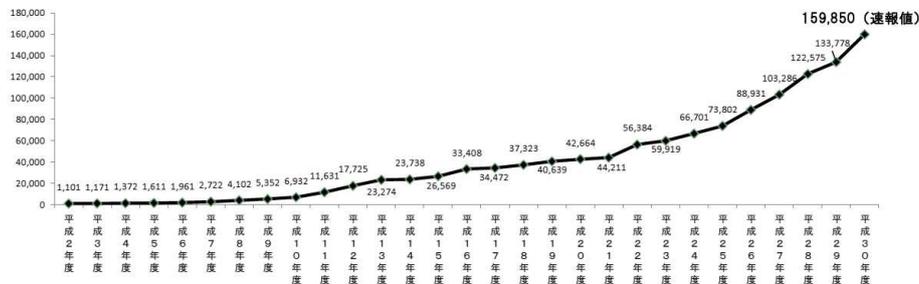
全ての児童生徒の安心感を高められる学校を目指して

地域文化学科 地域社会・心理実践講座 柴田 健

児童虐待件数について考える

数字の中の子どもの姿とは

児童虐待件数の増加



厚生労働省 (2019)

こうした増加に対する厚生労働省の説明

○**心理的虐待に係る相談対応件数の増加**

(H29年度：72,197件⇒H30年度：88,389件 (+16,192件))

○**警察等からの通告の増加**

(H29年度：66,055件⇒79,150件 (+13,095件))

○**心理的虐待が増加した要因として、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力がある事案 (面前DV) について、警察からの通告が増加**

▶ 3

「心理的虐待の増加」「面前DV通告」の増加をどう考えるか

	身体的虐待	ネグレクト	性的虐待	心理的虐待	総数
平成21年度	17,371 (39.3%)	15,185 (34.3%)	1,350 (3.1%)	10,305 (23.3%)	44,211 (100.0%)
平成22年度	21,559 (38.2%)	18,352 (32.5%)	1,405 (2.5%)	15,068 (26.7%)	56,384 (100.0%)
平成23年度	21,942 (36.6%)	18,847 (31.5%)	1,460 (2.4%)	17,670 (29.5%)	59,919 (100.0%)
平成24年度	23,579 (35.4%)	19,250 (28.9%)	1,449 (2.2%)	22,423 (33.6%)	66,701 (100.0%)
平成25年度	24,245 (32.9%)	19,627 (26.6%)	1,582 (2.1%)	28,348 (38.4%)	73,802 (100.0%)
平成26年度	26,181 (29.4%)	22,455 (25.2%)	1,520 (1.7%)	38,775 (43.6%)	88,931 (100.0%)
平成27年度	28,621 (27.7%)	24,444 (23.7%)	1,521 (1.5%)	48,700 (47.2%)	103,286 (100.0%)
平成28年度	31,925 (26.0%)	25,842 (21.1%)	1,622 (1.3%)	63,186 (51.5%)	122,575 (100.0%)
平成29年度	33,223 (24.8%)	26,821 (20.0%)	1,537 (1.1%)	72,197 (54.0%)	133,778 (100.0%)
平成30年度 (速報値)	40,256 (25.2%) (+7,033)	29,474 (18.4%) (+2,653)	1,731 (1.1%) (+194)	88,389 (55.3%) (+16,192)	159,850 (100.0%) (+26,072)

厚生労働省 (2019)

(高い養育・教育水準と高い人権意識) そうした基準の高まりこそが、ささいな攻撃・放置を、重大な事案として取り上げているという説明図式をもつべきなのではないか (内田, 2009)

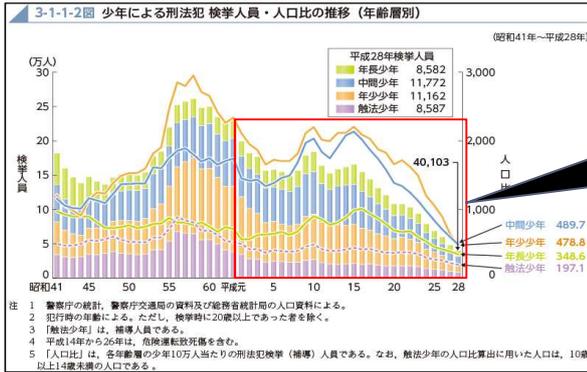
見えなかった部分が明らかになってきただけではないのか？
何よりも、虐待件数分存在する子どもたちに我々は何ができるのだろうか？

▶ 4

虐待を受けた子どもたちは我々の前にどのように現れるのだろうか？

一番考えられるのは、**非行**

しかし・・・



少年による刑法犯検挙人員と人口比は明らかに減少している

虐待を受けた子どもは 何処へ？

5 犯罪白書（2018）より複写

「心理的虐待」「面前DV」が子どもにもたらす影響（友田, 2016; 2018）

身体的虐待やネグレクトを受けた人よりも、親のDVを目撃し、かつ自分ものしられた人の方が、トラウマ症状が重篤（友田, 2016）

- 言葉による虐待を受けた被害者は大脳皮質の側頭葉にある「聴覚野」の一部の容積が肥大化していた。中でも左脳の聴覚野の一部の容積が平均14.1%も増加。
- DVを平均4.1年間目撃して育った子は、視覚野の容積が平均16%減少。



友田（2018）より複写

「心理的虐待」「面前DV」は、こころの問題ではなく、脳の問題である

6

ACE研究が示すこと

逆境的小児期体験の影響とは

7

逆境的小児期体験研究

(Adverse Childhood Experience Study : ACE研究; Felitti, et al. 1998~)

小児期の逆境的小児期体験が子どもに、そして子どもが大人になったときにどのような影響を与えるのかに関する研究

ACEの質問項目 (18歳までの体験として、「はい」または「いいえ」回答)

1. 繰り返し心理的な暴力を受けていた (暴力的な言葉で痛めつけられるなど)。
2. 繰り返し身体的な暴力を受けていた (殴られる, 蹴られるなど)。
3. 性的な暴力を受けていた。そのような体験をした。
4. 親に無視されていた。家族の仲が悪かった。
5. 親に食事や生活の世話をしてもらえなかった。
6. 両親のうちどちらかがいなかった (離婚した)。
7. 家族に服役中の人があった。
8. アルコールや薬物乱用者が家族にいた。
9. 母親 (継母) が暴力を受けていた。
10. 家庭に慢性的なうつ病の人いたり, 精神病を患っている人いたり, 自殺の危険がある人がいた。

個人と家族に関する質問各5項目

▶ 8

ACEスコアの示すもの

ACEスコアが4以上の人は、0の人に比べ…

健康リスク行動に関する調査 (Felitti, et al., 1998)

- ▶ 重度の肥満：1.6倍
- ▶ 喫煙：2.2倍
- ▶ 性感染症：2.5倍
- ▶ 50人以上の人と性交：3.2倍
- ▶ 自分はアルコール依存だと思う：7.4倍
- ▶ 薬物注射を使用：10.3倍
- ▶ 自殺未遂：12.2倍
- ▶ がん：2.0倍
- ▶ うつ：4.6倍
- ▶ 虚血性心疾患：2.2倍
- ▶ 脳卒中：2.4倍
- ▶ 慢性気管支炎または肺気腫：3.9倍
- ▶ 糖尿病：1.6倍

社会的機会に関する調査 (Metzler, et al., 2017)

- ▶ 高校中退：2.34倍
- ▶ 失業：2.31倍
- ▶ 貧困：1.56倍

その他

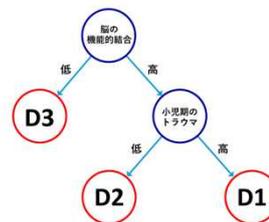
- スコアが1点増えるごとに、自己免疫疾患で入院するケースは20%上昇。
- ACEスコアが7以上の人は、飲酒も喫煙もせず、肥満や糖尿病でもなく、コレステロール値が低くても、心臓病のリスクがスコア0の人の3.6倍。
- スコアが6以上の人はテロメアの浸食が見られ、寿命がおおよそ20年短い。

▶ 9

ACEの関連研究

- ▶ うつ、物質乱用、不安障害、PTSDと診断されたケースのうち、過去に虐待歴のあるケースは、発症年齢が低い、症状が重篤である、依存症が多い、自殺のリスクが高い、治療反応性が低いなどの特徴がある (Teicher, et al. 2013)

- うつ病と診断された患者の生育歴とMRI画像を分析したところ、うつ病に3つのサブタイプがあることがわかった。
 - 小児期にトラウマ体験があり、かつ脳にある特徴が認められる患者は、SSRI（セロトニン取り込み阻害剤）の治療に反応しないタイプであることが判明 (D1)。
 - 小児期のトラウマがないタイプは、SSRIによく反応するタイプ (D2)。(Tokuda, et al. 2018)



▶ 10

日本におけるACE研究

矯正領域での研究が比較的多く見られるが、全体的にはきわめて少ない

▶ 松浦ら（2007）による少年院におけるACE質問紙を使用した調査

- ▶ 4カ所の少年院在院生（412名）と一般高校生（347名）とのACEスコアを比較。
- ▶ その結果、性的虐待を除きすべての項目で少年院在院生の方が該当率が高い。
- ▶ ACEスコア4以上の者は高校生では1%以下、少年院在院生の平均は10%以上。しかも、4カ所の少年院在院生のACE得点は同様の傾向
- ▶ 年少の少年を収容している少年院では、身体的虐待、心理的虐待、DVが他の少年院に比べ高い。

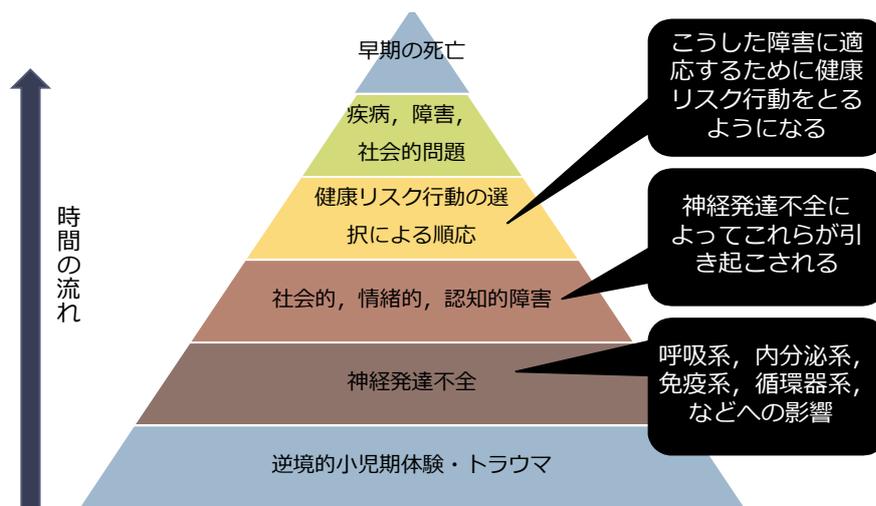
▶ 同（2007）によるACEとLD、ADHDスクリーニングテストとの比較

- ▶ 少年院でのLD疑い群は66.5%、ADHD疑い群は82.7%

▶ 11



なぜこのようなことが起きるのか：ACEのピラミッド

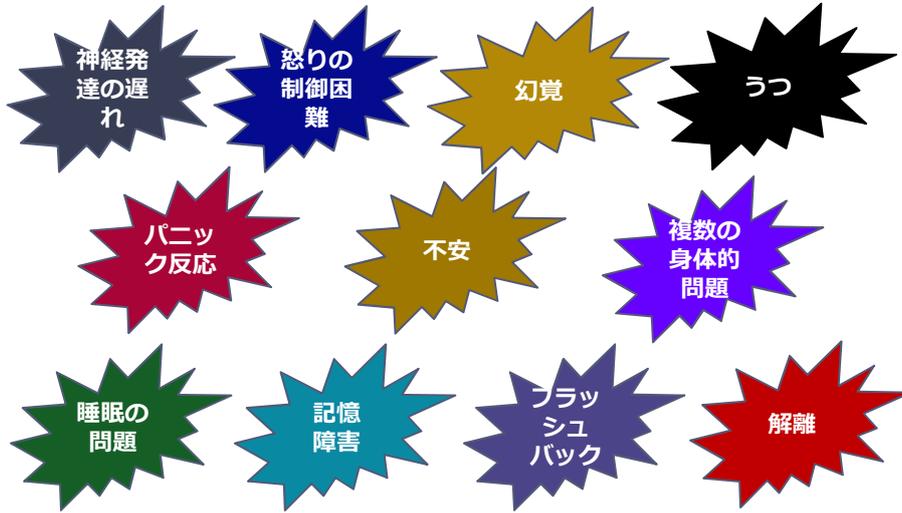


▶ 12



Fellitti, et al.(1998)より一部修正

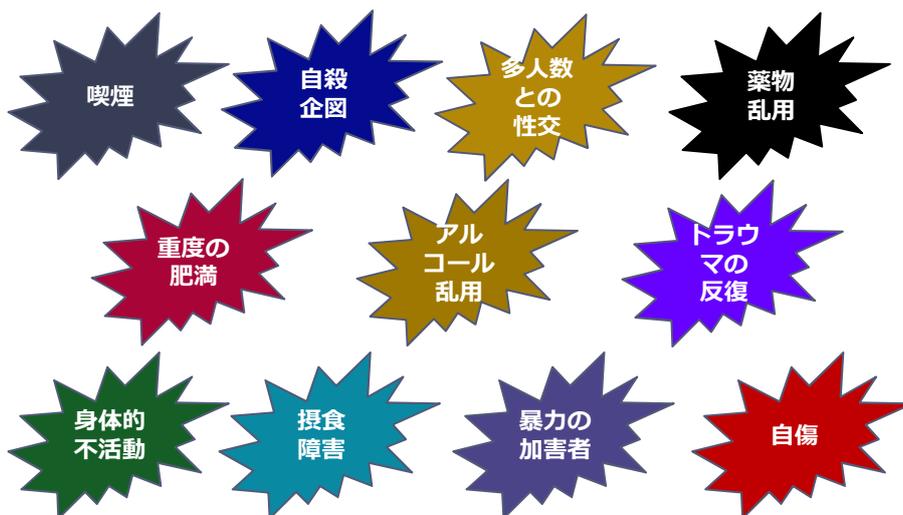
ACE体験（トラウマ）の神経生物学的影響（遊佐, 2019より）



▶ 13



苦痛を和らげるための健康リスク行動（遊佐, 2019より）



▶ 14



対応されないACE（トラウマ）の長期的影響（遊佐, 2019より）

疾病と障害	社会的問題
虚血性心疾患	ホームレス
ガン	売春
慢性閉塞性肺疾患	非行
慢性肺気腫	暴力
ぜんそく	犯罪行為
肝炎	離職
頭蓋骨骨折	レイプ, DVの被害者
自己申告された健康問題	医療, 精神保健, 矯正施設, 福祉サービスの長期利用
性感染症	虐待の世代間伝達
HIV/AIDS	

「疾病と障害」には精神疾患が入っていない（さらに長期的影響は広がることになる）

▶ 15

心の傷とは

トラウマが引き起こす症状とその影響

16

「ねえねえ、岡村。なぜ緊張すると口が渴くの？」

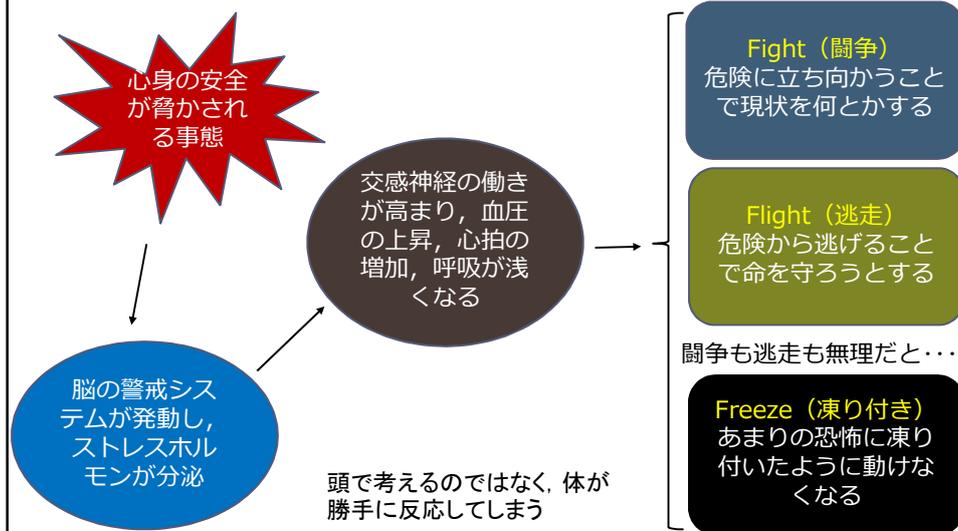


「チコちゃんに叱られる。(2018年7月20日放送)より

▶ 17

3つのF :

トラウマ体験は3つの反応を引き起こす



▶ 18

白川(2019)を改変

危険が去っても元に戻らず、
記憶が瞬間冷凍される

食べきれない（処理できない）から冷凍される



(パッケージとしての) ト라우マ

諸感覚（視覚・聴覚）などの記憶
情緒・感情・思考・認知

一度に溶け出すと「再体験」症状が起こる
何らかの引き金（トリガー）によって解凍
が始まると、冷凍されたトラウマは一気に
溶け出す。そうすると、その時の記憶が一
気に戻り、再び3つのFに戻り、その後再凍
結される。

白川（2019）を改変

▶ 19

トラウマによる主な症状

（白川，2019による）

脅威感

神経の高ぶりが続く。体の状態をうまくコントロールできなくなる。

再体験

トラウマ体験時の記憶が勝手によみがえる。

回避

トラウマ体験を思い出すような状況を避け続ける。適切な行動が取れない。

複雑性PTSDの症状

ネガティブな自己概念 （認知の調節障害）

ものごとのとらえ方にゆがみが生じ、極端な自己否定感を持ちやすい。自分に対してだけでなく、他者、世界を見る目も変わってしまう。

さらに…

対人関係の障害

他者との関係を維持し、親しくなることができなくなる。

感情の調節障害

感情をコントロールできなかったり、自分の気持ちがわからなくなったりする。

PTSDの症状

▶ 20

学校と虐待，トラウマの関連性

虐待を受けている子ども（面前DVを含む）は、何らかの脆弱性を抱えている可能性が高い

- ▶ 学校での現れ方
 - ▶ ADHD, ASD様行動
 - ▶ 「被虐待児が、その異型連続性の中で、特に学童期において、発達障害の臨床像を示す。素因がある子どもにおいて、より明確な発達障害の臨床像が示される。しかし、発達障害の素因自体は極めて普遍的に認められる（杉山, 2019）」
 - ▶ 発達性トラウマ障害（van der Kolk, 2009）
 - ▶ 感情制御の発達不全：キレル子ども
 - ▶ 子どもたちが不快感情を安全に抱えることができない。この背景には虐待等により愛着行動形成が行われていないために、PTSD様の状況に陥るためである（大河原, 2010）
 - ▶ 特に、日本では、良い子として育った子どもにこうした特徴が見られることがある（同）

学校で起きる様々な問題の背景にはこうした特徴が隠れている可能性がある

▶ 21

さらに、学校自体がトラウマ体験を助長することもある：
Big “T” trauma と Small “t” trauma （Shapiro, 2001; Hensley, 2015）

▶ Big “T” trauma（大文字のトラウマ）

- ▶ 一般的にトラウマティックと判断されるような出来事
- ▶ 重大な事故，自然災害，人災，大きな人生の変化，身体的・性的暴行，大きな手術，重篤な病氣，進行中の出来事，戦争など

▶ Small “t” trauma（小文字のトラウマ）

- ▶ トラウマティックとは言えないが苦痛となるような出来事
- ▶ しばしば幼少時から累積される
- ▶ 子ども時代の頻回の引っ越し，過剰ないじめ，しつこく繰り返される身体疾患，繰り返される批判，拒否，裏切り行為，さげすんだ物言い，離婚や夫婦の不和，ペットの死，公の場での辱め，持続的な嫌がらせなど

Small “t” traumaは、それ自体はトラウマ的とは言えないが、繰り返し体験することにより、PTSDの発症可能性が高まる

▶ 22

トラウマインフォームドケア

トラウマを考えた全ての人に優しいケア

人はみな傷ついている



臨床心理学20(1), 2020の表紙

トラウマとなるような
体験は稀ではない

- ACEの得点が1点以上の人は普通にいる
- 高い人も我々が考えるよりもたくさんいる
 - 児童養護施設の子どもたち
 - 少年院や鑑別所にいる少年たち
 - ASDやADHDと診断されている子どもたち
 - うつや不安障害などを発症している人たちの中にも
- 子どもにとって、親の期待に応えて良い子であることもつらい体験となる可能性がある
- 環境によって傷つきが悪化することもある
- こうした心の傷を抱える人を支援する人もまた傷ついてしまう

トラウマインフォームドケア (TIC)

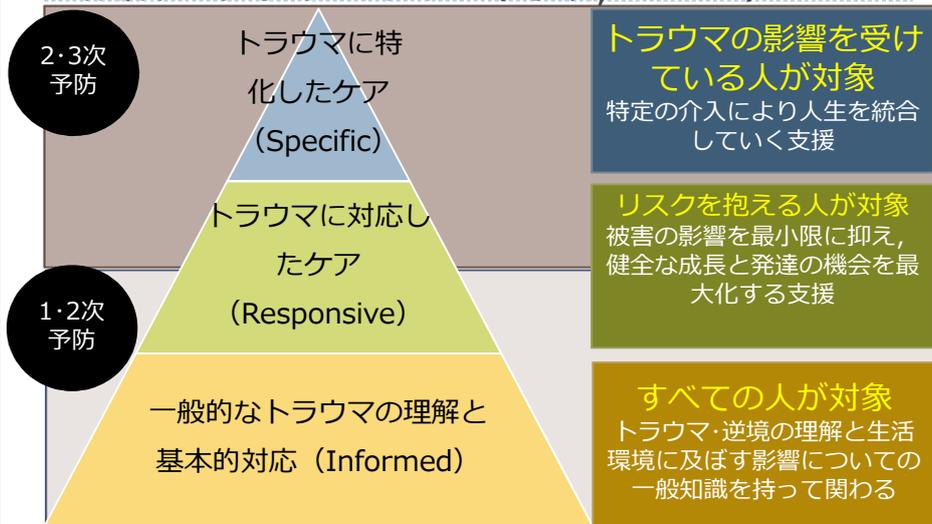
トラウマの影響を理解しそれにしっかりと対応するための強みを基盤にした枠組み (Hopper, et al., 2009)

- ▶ **トラウマによって生じている反応を「問題行動」や「困った人」といった否定的な見方でとらえるのではなく、トラウマの影響としてとらえる (野坂, 2019を一部改変)**
 - ▶ なぜなら、トラウマや逆境体験の多くは、当事者が語らない (語れない)
 - ▶ そのため、本人が心身の不調を訴えても何が起きているのかわからない
 - ▶ みんな自分のせいでこうなったと考えている
 - ▶ だから、何かをしようとしてもあきらめてしまう

さまざまな行動の背景にある「見えていない」ことを、
トラウマの「メガネ」で「見える化」する関わり

▶ 25

3段階のトラウマケア (野坂, 2019)



▶ 26

必ずしもトラウマの治療を意図しているわけではない

も

トラウマインフォームドケアにおける3つのEと4つのR (SAMHSAによる)

▶ 3つのE (トラウマ理解のために)

- ▶ Event : ト라우マとなる出来事 (どのような出来事だったのか)
- ▶ Experience : ト라우マ暴露体験 (それはどのような体験だったのか)
- ▶ Effects : ト라우マによる影響 (それはどのような影響を及ぼしたのか)
 - ▶ その人がどのような感情状態でそのトラウマを体験し、その体験をどのように認知しているのか、さらにはその人がトラウマを体験したときの年齢や発達段階・文化的信念や社会的サポートはどのような状況だったのか。

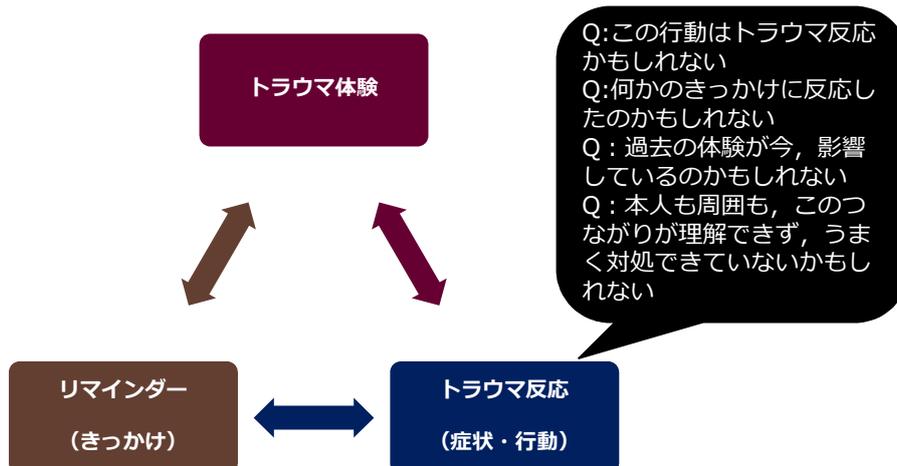
▶ 4つのR (TIC実践のために)

- ▶ Realize : ト라우マの広範囲な影響とその回復過程を理解していること
- ▶ Recognize : クライアント・家族・支援者のトラウマサインや症状を認識すること
- ▶ Response : ト라우マについての十分な知識に基づいて対応し適切な方針や手段を実践すること
- ▶ Resist re-traumatization : これらが結果的にトラウマの再被害化を予防する

▶ 27

す

3つのE : ト라우マの影響を「見える化」する



亀岡 (2020) を一部改変

▶ 28

も

トラウマセンシティブスクール

全ての子どもたちの安心感を高めるアプローチ

29

トラウマセンシティブスクール (TSS)

全児童生徒が安心、受容、支持を感じ、学校全般における学習へのトラウマの影響に対処することが目標 (Cole, et al., 2013)

トラウマセンシティブスクールが考えられるようになった背景

1. **小児期逆境体験 (ACE) 研究からの知見**
 - ▶ 幼稚園から小学校までを対象にした研究では44%が1つ以上のACEsを体験。ACEsの累積度が高くなると学業不振 (読み、書き、算数)、出席や行動上の問題のリスクが高まる (Blodgett & Lanigan, 2018)。
2. **トラウマの学校への影響**
 - ▶ 養育者がトラウマを抱えている場合、学校との関係がとりにくくなり、これが保護者と学校間の問題になることがある。
 - ▶ 教職員がトラウマを抱え、感情がコントロールできずに問題を生じさせてしまうこともある。
3. **ゼロトレランス教育政策**
 - ▶ ゼロトレランスの導入が増えると、次第に些細な違反に対しても適用されることが増えてきた。その結果、停学・退学者が多くなり、結果的にリスクの高い生徒を学校から追い出すことになった。
 - ▶ 罰は行動の模範とならないし、効果も教師の存在に依存するものとなった。

▶ 30

TSSの構成要素

トラウマの影響を受けている児童生徒が安心して学習できるような安全な環境作りや、トラウマにより影響を受けた社会性や感情のコントロールのスキル獲得を目指す（中村・岩切，2019より）

1. **多層支援**
 - ▶ 3段階のトラウマケア（スライド26）を参照。
2. **教職員研修**
 - ▶ トラウマの基本的な理解に加え、教職員の共感疲労、二次的外傷性ストレスの内容も含む。
3. **トリガーに配慮する**
 - ▶ 再体験を引き起こすトリガーに配慮する。怒鳴り声、大きな物音、座席の配置等がトリガーになり得るので、聞き取りによってトリガーを明らかにし、接した場合どうするかを子どもの間で決めておく。
4. **学校の行動期待を明確化**
 - ▶ 子どもによってはルールが明確されていない環境で生育してきているので、学校で大切にしたい価値を含めて、期待する行動を図示する。行動の結果にはフィードバックがなされる。
5. **SEL (Social and Emotional Learning)**
 - ▶ 社会性（対人関係）に関するスキル、態度、価値観を育てる学習を行う。
6. **情報共有**
 - ▶ 管理職、学年主任、学級担任、生徒指導主任、養護教諭などとの情報交換の機会を設定し、児童生徒の行動を重層的に理解する。

ま

▶ 31

おわりに



NHK土曜ドラマポスター

▶ 32

このような関わりができますように・・・

開会あいさつ・講演講師紹介（委員長）



講演会 柴田健 教授



謝辞・あいさつ 佐藤修司 学部長



司会 小玉雅彦 附属幼稚園副園長



各部会の様子



令和元年度 部会活動報告書

<教科別部会>

- ・国語
- ・社会
- ・算数・数学
- ・理科
- ・音楽
- ・図画工作・美術
- ・体育・保健体育
- ・英語（外国語活動）
- ・技術・家庭

<領域別部会>

- ・総合
- ・道徳
- ・生徒指導
- ・特別活動
- ・情報教育
- ・学校経営
- ・FD

<校園別部会>

- ・幼稚園
- ・中学校

令和元年度 部会活動報告書

部会名	国語	記入者名	伊岡森真由（附属特別支援学校）
<p>〈今年度の実績〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 附属小学校校内研修会 ・ 附属小学校公開研究協議会 ・ 附属小学校オープン研修会 ・ 附属中学校公開研究協議会 ・ 附属特別支援学校オープン授業研修会 <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学との連携として、上記の研修会等に向けて、教材選定から教材分析、事前事後指導検討会まで、ご指導いただきながら授業作りを進めることができた。 ・ 小中特で授業を相互に見合うことで、様々な視点から授業について考える機会となった。児童生徒の発達段階に応じた指導について相互に理解を深めた。 <p>〈次年度の予定、課題〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 附属中学校公開授業研究会、オープン研修会 ・ 附属小学校公開授業研究会、校内研修会、オープン研修会 ・ 附属特別支援学校オープン授業研修会 <p>〈次年度の体制〉</p> <p>部会長 山崎 義光</p> <p>副部会長 附属特別支援学校 伊岡森真由</p> <p>書 記 附属中学校 佐藤 優子</p>			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	社会科	記入者名	小熊 大樹 (所属 附属中)
<今年度の実績>			
1 公開研究協議会に向けた取り組み。			
・小中とも公開研究協議会に向けて事前打ち合わせ・指導案検討を行った。			
事前打ち合わせ 小学校：5月17日(金) 中学校：5月8日(水)			
公開研究協議会 小学校：6月7日(金) 中学校：5月31日(金)			
2 部会内での取り組み			
・小学校：部内研究会(11月：3年生)			
東北附連で研究授業を行う予定だったが、授業者の石井先生が体調不良で欠席したため指導案検討会のみ開催となった。			
・中学校：授業を見合う会(2月：1年, 2年)			
今年度の反省を踏まえた普段の授業を見合い、授業改善に活かす試みを行った。			
3 共同研究の取り組み			
秋田大学の社会科教育学研究会による授業づくり演習の一環として、「日本の自然災害」をテーマにした授業実践を行った。			
・小学校での実践：7月16日(火) 12:50~14:05(4年C組)			
・中学校での実践：7月18日(木) 10:55~12:45(2年B組)			
4 大学での講義			
・初等社会科：将来教職を希望している学生に対し、社会科を学ぶ意義、社会科の授業のあり方について4回(附属小教員, 附属中教員, 各2回)にわたり講義を行った。			
・初等社会科教育学B：附属小教頭の堀川修先生と鈴木聡先生が1回ずつ講義を行った。			
<次年度に向けた予定・課題等>			
1 公開研究協議会に向けた打ち合わせ, 指導案検討			
2 部会内での取り組み(小学校：部内研修会, 中学校：授業を見合う会 など)			
3 授業づくり演習(大学生による授業実践)			
小学校：7月上旬~下旬(詳細未定) 中学校：7月上旬~下旬(詳細未定)			
4 大学での講義			
・初等社会			
・初等社会科教育学B			
<次年度の体制>			
・部会長 加納 隆徳 先生(秋田大学)			
・副部会長 幸野谷憲司 (附属中)			
・書記 鈴木 聡 (附属小)			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	算数・数学	記入者名	保坂 智子
<p><今年度の実績></p> <p>〈附属中〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開研，理数プロジェクト（20～30名参加），授業を見合う会の実施。 <p>〈附属小〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開研，校内研（9／30，11／22）の実施。 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>〈附属中〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5月中旬，春期授業研（数学）…ICTを取り入れた授業構想を予定。 ・6／5（金） 公開研実施予定。 <p>〈附属小〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6／12（金）公開研実施予定。 ・校内研，またはオープン研の実施。 <p>〈課題〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材分析協力者による授業（指導案）への協力体制。 <p><次年度の体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・部会長は大学の先生が引き受けてくださる予定。 ・副部会長は小学校から，書記は中学校から1名ずつ。 （毎年交代で引き受ける） 			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	理科	記入者名	石井照久 (教育文化学部)
<p><今年度の実績></p>			
<p>附属小学校</p>			
<p>○公開研究協議会（6月7日）では、「電流のはたらきを調べよう」（村上4C）の研究授業を行った。研究協力者は、学部の田口で、教材分析協力者は学部の林（正），岩田，清野，河又，石井，林（信），本谷であった。研究協力者に加え教材分析協力者からの詳細な教材分析が授業研究に活かされた。また，この研究成果は，2019年度第1回日本科学教育学会研究会（東北支部開催:岩手大学）にて，「小学校第3・4学年理科におけるプログラミング教育の検討」の題で口頭発表された。内容は，J-STAGEに掲載されている。</p>			
<p>○第一回校内研修会（5月22日）では，「燃えるって？」（清水6A）の授業提示を行った。研究協力者は学部の田口，教材分析協力者は学部の岩田，石井と清野であった。学部教員の協力により，科学概念の定着を促進するパフォーマンス課題の在り方や，ものの燃焼の原理への科学的理解という点において，より質の高い授業研究を行うことができた。</p>			
<p>○理科授業「大地のつくりを調べよう」を学部の林（信）が6Cを対象に行った（10月25日）。断層や噴火のメカニズムを理解したり，噴火や地震がもたらす災害についても理解を深めたりと，防災教育的な見地からも自分たちの生活を見直す契機となった。</p>			
<p>○理科授業「生物どうしのかかわりを調べよう」を学部の田口が6A，6B，6Cの3クラスで各1コマずつ行った（11月27日）。ミジンコなどの観察を通し，微生物の生態に関して理解を深めること，陸上だけでなく水中にも食う食われるの関係があること，への理解が深まった。授業については，教育実践研究紀要に掲載予定である。</p>			
<p>附属中学校</p>			
<p>○公開研究協議会に向けて事前打合・指導案検討を行った（5月9日）。</p>			
<p>○公開研究協議会（5月31日）では「化学変化と原子・分子」（2A 菊地）の研究授業を行った。研究協力者は，元本学部の川村であった。学部教員の協力により，協議会に参加した公立学校の先生方からは「自校でも実践してみたい」という感想を頂け，研究校としての役割と研究授業の効果を実感できた。</p>			
<p>○総合的な学習研究発表会（通称 DoveAcademy ダブアカデミー）（10月12日）での理科のプロジェクトとして11時30分～12時30分の60分程度で秋田県の小学校6年生約80名を対象としたワークショップを附属中学校第2学年の科学部員が実施した。内容としては①「雲をつくろう」，②「食塩水を使って虹をつくろう」，③理科の実験器具の使い方，であり学部の本谷が協力した。中学校の学習内容が中心だったため，小学生にとって興味関心を刺激されるものであり，学部教員の詳しい解説もあり，小学生は楽しみながら参加していた。</p>			
<p>○附属中学校の生徒から希望者を募集し，秋田大学教育文化学部の理科教員の出前授業として科学講座を2回行った。11月22日には学部の石井による「生き物の体のつくりを簡単な解剖を通して学ぼう！」（30名参加）が行われた。12月20日には学部の本谷による「雲と雪の成り立ち」（30名参加）が行われた。日常と深く関わり発展的な内容であるため，参加した中学生が高い関心をもって質問する姿が見られた。</p>			
<p>○授業を見合う会（2月26日）では「浮沈子」（1A 島田），「電磁誘導」（2B 菊地）</p>			

の2つの授業を学部の林（信）の協力のもと実施した。授業ではミエルトークを取り入れたため活発な話合いが展開され、終始建設的で楽しい雰囲気が感じられた。

<次年度に向けた予定・課題等>

附属学校のニーズと学部で実行可能な題材をすり合わせるにより、様々な形で附属小中学校と学部との連携をより強化していくことが確認された。具体的には、小学生の参加人数が増えているダブアカデミー（附属中学校で実施している）の規模を拡張することや、日食観察などの天文イベントを追加で実施し、子どもたちの興味・関心を高めていく機会を増やしていくこと、などがあげられた。また、子どもたちの学習活動の成果をより高めるために、令和2年度の附属小の5年部の宿泊体験学習での夜間の天体観測の活動に、学部教員が積極的に協力することも視野に入れていきたい。

<次年度の体制>

部会長：石井照久

副部会長：村上宙思

書記：池田 央

令和元年度 部会活動報告書

部会名	音 楽	記入者名	吉澤 恭子
<p><今年度の実績></p>			
<p>【附属小学校】</p>			
<p>(1) 2019年6月7日(金)に開催された公開研究協議会では、大山光子教諭による3年生の授業が提案された。題材名は「きき合って 合わせて～重ねて歌おう」。音や声の重なりに着目し、互いの歌声や副次的な旋律、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うという資質・能力を高めることを目的とし、豊かな対話を紡ぎながら児童の音楽科の見方・考え方を引き出す授業が提示された。</p>			
<p>(2) 2019年9月30日(木)に校内研修会が行われ、小林葉子教諭による1年B組の授業が対象となった。題材名は「こんにちは けんばんハーモニカ」。鍵盤ハーモニカの基礎・基本を学んだばかりの児童一人一人が、楽器で旋律をつなぐ表現活動へと発展させていた。</p>			
<p>(3) 小学校音楽科の応用的な実践力の育成を図るため、学部3年生に開講している「初等音楽」(後期担当:吉澤恭子)において、2018年度より「訪問演奏会」を企画・導入している。2年目にあたる今年度は、2019年11月28日(木)に開催された。対象は5年生(全3クラス)、歌唱領域を中心とした演目が披露された。</p>			
<p>【附属中学校】</p>			
<p>(1) 「指揮」と「合唱」の分野において、大学と協働的な取り組みが行われた。</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2019年8月28日(水)～9月2日(月)、全クラス学年毎に指揮の指導を実施。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2019年9月20日(金) 3年C組「合唱を完成させるまでの方法論のまとめ」(出前授業)を実施。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2019年9月「校内合唱コンクール」(課題曲《附中讃歌》および学級別自由曲1曲)の指揮の指導を実施。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2019年9月13日(金) 秋田市文化会館で開催された「校内合唱コンクール」の審査・講評。(以上、石原慎司講師担当) 			
<p>(2) 2020年3月上旬に「オープン研修会」を予定している。</p>			
<p><次年度に向けた予定・課題等></p>			
<p>次年度は附属小・中学校共に、2020年6月に公開研究協議会の開催を予定している。</p>			
<p>共通の課題として、以下の点が挙げられる。</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学と附属学校園の音楽実践交流の継続と教員間による共同研究の着手。 			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 附属小学校における「訪問演奏会」の充実化と実施時期について。 			
<p><次年度の体制></p>			
<p>部会長:吉澤 恭子(附属小学校担当)</p>			
<p>副部会長:石原 慎司(附属中学校担当)</p>			
<p>書記:大山 光子 小林 葉子 江畑 美香</p>			

部会名	図画工作・美術	記入者名	長瀬達也
<p><今年度の実績></p>			
<p>附属小学校</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・11月22日 校内研修会 第2学年「おもしろ〇〇タワー（立体）」 長瀬達也教授は指導講話を担当した。なお、事前から参加。 内容：はさみや簡単な小刀を使い、色画用紙（カラードフォルム）の切り抜き方や切り起こし方、形や色の組み合わせなどを工夫して「タワー（建物）」に表す。 事前に、カッターナイフの使い方の指導や、練習の時間を設けたことで、子どもたちに安全な使い方の技能を身に付ける貴重な機会となった。 ある程度作品が形になってきたところで、自分のタワーに名前を付けるようにした。自分が名付けたタワーの名前の感じに合っているか確かめながらつくり、つくり直すことができた。 効果的な省察を生み出すための手立てとして、名付けが有効だったと感じる。 			
<p>附属中学校</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習では、学部側の指導者と情報交換しながら、実習生の指導に当たることができ、個々に合った細やかな指導をすることができた。 ・公開研究協議会に向けての取組では、小学校教諭の2人にも協力していただき、参考作品を2つ作成してもらい助かった。 ・題材開発や授業展開において、遠藤敏明教授から多数の助言をいただき、研究を深めることができた。 			
<p>附属特別支援学校</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・1月29日 オープン研修会 小学部3・4年生わかば学級「粘土による造形遊び」 長瀬達也教授が指導講話などを担当。 ・1月29日のオープン研修会の以外にも、長瀬教授には事前から授業を参観していただき、打ち合わせや相談をさせていただいたり、事後研も見学していただいたりして、感想や助言を伺うことができた。「造形あそび」について、職員がどのようなスタンスで指導をすべきか悩むことが多かった。何かを作らせようとするのではなく、教師と一緒に楽しむこと、発想が広がる環境を整えることが大切であることが、長瀬教授との話し合いで確認ができた。粘土の扱いについて、材料としての使用に消極的になる職員もいたが、土粘土を利用したことで準備や扱いが容易であり、児童も自分で何度も作り変えて、様々な表現方法を試し、粘土に無心でじっくり向き合う姿が見られた。長瀬教授に助言をいただくことで、材料や用具の重要性、形・色・質感などからのイメージ、美術的なものの見方や捉え方に触れることができ、職員間で共有できた。 			
<p><次年度に向けた予定・課題等></p>			
<p>附属小学校</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・「おもしろ〇〇タワー（立体）」では授業者として、紙の切り抜き方や切り起こし方、形や色の組み合わせなどに着目してつくって欲しいという思いがあった。しかし、子どもの発達段階としては、自分のイメージから具体的なものをつくりたいと思う子どもも多く、作品の完成イメージにぶれがあった。学部との共同研究などが必要である。 例：「まどいっぱいタワー」は、切り抜いた形や色に着目している。 「アスレチックタワー」は、遊ぶと楽しそうな建物という具体的なイメージ。 			

附属中学校

- ・ 題材開発や授業展開の工夫において、小学校の教諭ともっと意見交換し、研究に取り組んでみたかった。
- ・ 学部へもっと足を運び、題材開発に取り組んでみたいと感じている。
- ・ 学校種を越えて、互いの学校に出前授業を企画設定したり、合同授業を実施したりと、小学校や大学との連携を試みたい。

附属特別支援学校

- ・ 今後は、小学部の 6 年間の教育課程の中で、図工の指導内容をどのように系統化していくかが課題であると感じる。

<次年度の体制>

部会長 : 長瀬達也 (学部)

副部会長 : 進藤 亨 (附属小学校)

書記 : 伊藤知佐子 (附属中学校担当)

令和元年度 部会活動報告書

部会名	体育・保健体育	記入者名	松本 奈緒
<p><今年度の実績></p>			
<p>公開研究協議会</p>			
<p>・附属小学校公開研究協議会 ボール運動領域「動きを高め、ゴールをめざせ！～サッカーを基にした簡易化されたゲーム～」</p>			
<p>授業者：佐々木雅巳</p>			
<p>研究協力者：伊藤恵造 教材分析協力者：渡邊和仁</p>			
<p>・附属中学校公開研究協議会 保健領域「医薬品の正しい使用」</p>			
<p>授業者：藤倉 修 研究協力者：松本奈緒</p>			
<p>大学の授業での外部講師</p>			
<p>・大学の「保健体育科教育学」（担当：松本奈緒）において保健体育科教諭を目指した契機や日々の業務内容等の講話 外部講師：藤倉 修</p>			
<p>研究協力</p>			
<p>・科学研究補助金基盤研究（C）の「子どもの認識から学習内容を検証するー子どもの描画分析を中心としてー」（研究代表者：松本奈緒）の研究協力</p>			
<p>ボール運動ネット型 附属小 佐々木雅巳（5年生）、佐藤秀恒（3年生）</p>			
<p>その他</p>			
<p>・附属小学校東北附連授業研究会 研究授業 マット運動（3年生） 佐々木雅巳</p>			
<p>・附属中学校東北附連授業研究会 研究授業 柔道（1年生） 津島加奈子</p>			
<p><次年度に向けた予定・課題等></p>			
<p>公開研究協議会</p>			
<p>・附属小学校公開研究協議会の協力</p>			
<p>大学の授業での外部講師</p>			
<p>・大学の「保健体育科教育学」（担当：松本奈緒）において保健体育科教諭を目指した契機や日々の業務内容等の講話を附属中学校に依頼。</p>			
<p>研究協力</p>			
<p>・科学研究補助金基盤研究（C）の「子どもの認識から学習内容を検証するー子どもの描画分析を中心としてー」（研究代表者：松本奈緒）の研究協力を附属小学校に依頼。</p>			
<p><次年度の体制></p>			
<p>部会長：松本奈緒（秋田大学）</p>			
<p>副部会長：藤倉 修（秋田大学教育文化学部附属中学校）</p>			
<p>書記：佐藤秀恒（秋田大学教育文化学部附属小学校）</p>			
<p style="text-align: right;">（以上敬称略）</p>			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	英語（外国語活動）	記入者名	若有 保彦
<p><今年度の実績></p>			
<ul style="list-style-type: none"> ●学部の教育の充実に向けた共同の取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・教育実習事前指導での講義及び附属中での一日実習の実施 ・英語教育コースの学生が附属小学校及び附属中学校で卒論執筆に向けた調査を実施 ・「初等英語科教育学」の模擬授業について，附属小学校の藤田先生及び佐々木絵理子先生から実地指導講師としてご指導いただいた ●公開研究協議会などに向けた取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員と中学校英語担当教員または小学校外国語担当教員との打ち合わせ及び大学教員による事前の授業参観 ・附属小学校の公開研への留学生の協力 ●その他の取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・附属中学校の国際交流室への英語教育専攻学生と留学生の協力 ・附属中学校において，2月12日の「授業を見合う会」での授業参観及びコメント ・Rob先生の後任のALTに関する情報交換 ・東北附連での公開授業に関する情報の共有 ・3月8日に開催される小学校英語教育学会の研修会についての情報の共有 			
<p><次年度に向けた予定・課題等></p>			
<ul style="list-style-type: none"> ●公開研究協議会などに向けた取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・来年度は研究の完成年度であることから，附属小学校の公開研究協議会の研究協力者を佐々木雅子先生が，附属中学校の公開研究協議会の共同研究者を若有が継続して担当する。 ・附属小学校及び附属中学校において，前年度に引き続いて留学生の協力を得られる体制の構築を図る。 ●その他の取り組み <ul style="list-style-type: none"> ・附属小学校の外国語等の授業における留学生の活用 ・今年度は少なかった附属中学校の国際ルームにおける活動を活性化するための体制の構築を図る。 ・秋田英語英文学会や東北英語教育学会秋田支部の授業研究会への参加呼びかけ ・小中連携の充実が求められていることが共有された。充実させる一つの方策として，小中の教員が参観だけでなく，定期的に実際に交換指導することが提案された。 			
<p><次年度の体制></p>			
<p>部会長：佐々木 雅子</p>			
<p>副部会長：小松 紳（転勤の場合は菅原先生）</p>			
<p>書記：若有 保彦</p>			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	技術・家庭	記入者名	佐々木 絵理子
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 附属小学校公開研究協議会への参加（大学：堀江先生，中学校：近藤先生） <ul style="list-style-type: none"> ・家庭科授業の指導案検討会 ・公開研当日の授業参観（授業者：小学校 佐々木） ・授業研究会参加 ○ 教育実習生の指導（中学校家庭科担当：近藤史子先生 小学校担当：佐々木） <ul style="list-style-type: none"> ・主免及び副免 ○ 校内実践研究への助言（実践者：中学校 近藤先生，助言者：秋田大学 堀江先生） <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・R 2 公開研究協議会に向けた共同研究をお願いしたい。具体的には，公開授業題材の構想，指導案づくり，事前授業検討会及び検討会，公開研当日の授業解説，等。 ・教育実習生の指導 ・秋田大学に技術科がない。情報に関する技術などは，教育学専攻でなくとも大学教員のお力添えをいただいで授業研究ができればよい。 <p><次年度の体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校：家庭科部員 教諭 1名 ・中学校：技術科担当教諭 1名，家庭科担当教諭 1名 ・大学：准教授 堀江さおり先生， 特別教授 佐々木信子先生 			

部会名	総合（生活単元学習・遊びの指導・生活科）	記入者名	中野 良樹
<今年度の実績>			
1. 附属小学校における校園間連携の実績			
① 特別支援学校ふたば学級との交流			
1 年生			
1 回目	6 月 1 9 日（水）	1 0 : 4 5 ~ 1 1 : 3 0	
場所：附属小学校 内容：よつば学習「なかよくなろう」障害理解授業			
特別支援学校の菊地先生が来て授業			
2 回目	7 月 1 2 日（金）	1 2 : 0 0 ~ 1 2 : 4 0	
場所：附属小学校 内容：一緒に給食を食べよう			
3 回目	1 0 月 2 8 日（月）	1 0 : 4 5 ~ 1 1 : 3 0	
場所：特別支援学校			
内容：お話ふたば「おむすびころりん」の劇遊びと大玉ころがしゲーム			
4 回目	1 2 月 1 3 日（金）	1 0 : 4 5 ~ 1 1 : 3 0	
場所：附属小学校 内容：一緒にリレー・一緒に制作			
2 年生			
1 回目	6 月 1 9 日（水）	1 0 : 4 5 ~ 1 1 : 3 0	
場所：附属小学校 内容：よつば学習「なかよくなろう」障害理解授業			
特別支援学校の菊地先生が来て授業			
2 回目	6 月 2 6 日（水）	1 2 : 2 0 ~ 1 3 : 1 0	
場所：附属小学校 内容：一緒に給食を食べよう			
3 回目	1 0 月 2 4 日（木）	1 1 : 1 0 ~ 1 1 : 5 5	
場所：特別支援学校			
内容：お話ふたば「おむすびころりん」の劇遊びと大玉ころがしゲーム			
4 回目	1 月 3 0 日（木）	1 1 : 1 0 ~ 1 1 : 5 5	
場所：附属小学校			
内容：2 年生が考えたゲームと一緒にボール運びリレー・一緒に制作			
② 附属幼稚園との交流			
1 回目	なかよしタイムパート I 9 : 4 0 ~ 1 0 : 2 5		
場所：附属幼稚園 内容：七夕飾りをつくろう			
1 A 1 C	7 月 1 日（月）	1 B 7 月 2 日（火）	
なかよし給食 1 0 月 1 8 日（金） 1 2 : 2 0 ~ 1 3 : 0 0			
場所：附属小学校			
※ 1 0 月 1 5 日 1 6 日 1 7 日 長休みと昼休み みんなで遊ぼう			
2 回目 おいでよ附属小学校へ（なかよしタイムパート II）			
1 2 月上旬（附属小学校）インフルエンザ拡大のため中止			
2 月 3 日（月）体験入学で学校探検や学校体験をペアで行う			
※ 1 1 月中旬 幼稚園で葉っぱを拾う（秋を見つけよう）			
③ 学部との連携授業			
6 月 7 日 附属小学校公開研究協議会 提案授業			
嶋崎裕子：2 B 「めざせ！野菜名人」			
1 0 月 3 1 日 東北附連研究集会 提案授業			
渡部誠一郎：2 A 「うごくうごく ぼくのおもちや わたしのおもちや」			
※ 研究協力者：学部・中野良樹教授が指導案検討会から前時までの授業への参観および助言，当日の研究会での指導助言を行った。			

2. 附属特別支援学校における校園間連携の実績

① 小学校と特別支援学校の交流

(小学校は総合(1、2年生は特別活動)「よつば学習」、特別支援学校は生活単元学習として) 小学校1年生 ふたば学級と2回、小学校2年生 ふたば学級と3回、小学校3年生 わかば学級と6回、小学校4年生 わかば学級と6回、小学校5年生 あおば学級と6回、小学校6年生 あおば学級と7回。

② 幼稚園と特別支援学校の交流(小学部は遊びの指導、高等部は生活単元学習として)

そら組(年長)とふたば学級 7月、10月、2月に自由遊びで交流。

高等部1年生 5月、6月、9月、10月、11月にさつまいもの苗植え、水やり、看板作り、いもほり、焼きいも、つるを使ったリース作りで交流

<次年度に向けた予定・課題等>

令和2年度は、附属小学校においては上記の活動と同様に公開研究協議会の生活科提案授業を1年生、2年生担任教諭と学部教員が協働で行う。また、附属特別支援学校においては、小学校と特別支援学校の交流について、今年度同様、交流を継続する予定である。詳細については年度初めに決定する。また、幼稚園と特別支援学校の交流については、今年度同様に行事を継続する。

<次年度の体制>

部会長	中野 良樹	(こども発達・特別支援講座)
副部会長	細川 和仁	(こども発達・特別支援講座)
	下村 光行	(附属特別支援学校)
書記	佐藤 美里	(附属特別支援学校)

令和元年度 部会活動報告書

部会名	道徳	記入者名	小室真紀（附属小）
<p><今年度の実績></p> <p>①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導案の書き方についての講義・演習 教育実習事前事後指導：11月7日（木） <p>②公開研究協議会などに向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の公開研究協議会に向けて事前打合せ・指導案検討を行った。 事前打ち合わせ 5月14日（火） 公開研究協議会 6月7日（金） ・小学校の公開研究協議会のパネルディスカッションに向けて事前打ち合わせを行った。 事前打ち合わせ 5月17日（金）、22日（水） 公開研究協議会 6月7日（金） ・中学校の秋季授業研究会（オープン研修会）に向けて事前打合せ・指導案検討を行った。 事前打ち合わせ 10月29日（火） 秋季授業研究会 11月8日（金） <p>③学外の研究・研修団体などに関わる取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校新教育課程説明会 8月6日（火）於：天王南中学校 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 公開研究協議会等に向けた打ち合わせ、指導案検討 2 中学校秋季授業研究会（オープン研修会）を組み込んだ教員免許更新講習の計画・実施 3 部会内での取り組み（小学校：オープン研修会、中学校：授業研修会 など） <p><次年度の体制></p> <p>部会長：小池 孝範（秋田大学） 副部会長：伊藤 郁子（附属中学校） 書記：小室 真紀（附属小学校）</p>			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	生徒指導部会	記入者名	佐々木 雅巳 (所属 附属小)
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・各校の養護教諭と臨床心理士養成のための教育実習の打ち合わせを実施した。 ・スクールカウンセラーと打ち合わせを実施した。 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 公認心理師の教育実習の関しての打ち合わせの実施 ……柴田 健 (秋田大学) 2. スクールカウンセラーとの打ち合わせの実施 ……柴田 健 (秋田大学) 3. 事例検討会の実施 ……北島 正人 (秋田大学) <p>→ 1・2について：平成 30 年度から施行された公認心理師制度（国家資格）では、実習の際大学教員の他に、実習先（附属校園）に指導資格を持った公認心理師（本学の場合はスクールカウンセラー）が必要となる。</p> <p>学生は、大学内で事前・事後指導を行った上で子どもたちと触れる場を設ける。次年度もスクールカウンセラー、附属中 伊藤晃子教諭、柴田教員の三者間で打ち合わせを行う（小学校でも行う場合は、佐々木雅巳教諭と打ち合わせ）。特別支援学校ではイベント等に参加する形で実習を行い、指導は附属中のスクールカウンセラーが担当するという事も考えられる。</p> <p>→ 3について：4校園の養護教諭をはじめとして心理学教員との事例検討会を開催する。その際の4校園の窓口は附属小 佐々木真喜子教諭が担当する。</p> <p>※ 連絡方法は、生徒指導部会で一斉メール配信を用いてやり取りする。</p> <p><次年度の体制></p> <p>部 会 長： 北島 正人 (秋田大学)</p> <p>副部長： 伊藤 晃子 (附属中)</p> <p>書記： 佐々木 雅巳 (附属小)</p>			

令和元年度部会活動報告書

部会名	特別活動	記入者名	森 和彦(秋田大学) 島田 勝美 (所属 附属中) 鈴木 聡(所属 附属小)
-----	------	------	--

<今年度の附属中学校の実績>

①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み

●学習指導案作成指導

11 / 14・・・指導要領についてと指導案の書き方についての講義・演習

②秋季校内研修会に向けた取組

●題材名 「人が職業に就く理由とは」

活動内容 (3) 一人一人のキャリア形成と自己実現

イ 社会参画意識の醸成と勤労観・職業観の形成

ウ 主体的な進路の選択と将来設計

9 / 26 秋季研指導案事前検討会

10 / 18 秋季研指導案事前検討会

11 / 8 秋季研校内研修会【授業及び協議会】

<次年度に向けた予定・課題等>

①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み

●教育実習事前事後指導

指導要領についてと指導案の書き方についての講義・演習

●教職大学院での講義

②秋季校内研修会に向けた取り組み

●秋季校内研指導案検討会

●秋季校内研修会【授業及び協議会】

R1年度 附属小 特別活動の成果と課題

成果

1 「お試し」の活動やプレゼンテーションを効果的に位置付けた指導計画話し合った内容を実体験を通して確かめる「お試し」の活動やプレゼンテーションが、話し合う必要感を高め、主体的で目的意識をもった話し合い活動の展開に効果があることが分かったことが成果である。

「お試し」の活動を行うことにより、それまでの話し合いでは気付かなかった不十分な点を実感し、活動をよりよくするための解決すべき問題が明確となった。全員が共通の体験をしたことにより、問題の共有化が図られ、話し合う必要感のある話し

いの柱を設定することにつながった。話し合い活動と実際の活動とを往還することで、主体的で目的意識をもった話し合いの展開につながっていった。

また、話し合いの余地を残したアイデアのプレゼンテーションが有効であった。提案者が考えた段階で迷ったり悩んだりして決められなかったことを、敢えて残したまま原案として示した。そのことにより、話し合い活動を通して原案をよりよい考えに昇華させていこうとする話し合いの展開につながった。原案に敢えて曖昧な点を残したことにより、話し合いの視点が明確になり、話し合いが活性化されたと考える。

2 自他の変容を見つめる活動の位置付けと互いのよさを共有するための工夫

自分たちの話し合いの進め方について現状を把握し、よりよい合意形成の図り方への理解を深める効果的な手立てが分かったことが成果である。

単位時間の終末において、自分の話し合う力の現状や友達の話し合いにおけるよさを見つめる場を設けた。自分自身をふり返ることができるよう、自分が高めたい話し合いの力を学級会カードに記述して、話し合いに臨むこととした。また、相互評価を取り入れ、友達の参考にしたい姿を見いだすことができるようにした。これらのこと

が、自分の話し合う力の現状を自覚したり、友達の話し合う姿をもとに次の自分の話し合いのめあてを具体化したりする姿につながった。また、話し合いの進め方や合意形成の図り方のモデルとなるように、話し合い活動後に相互評価を行った。自他の変容を見つめる活動を積み重ねていくことを通して、よりよい話し合いの進め方や合意形成の図り方についての資質・能力を高め、「話し合いのめあてや提案理由から考えると…」 「二つの考えのよいところを合わせて考えると…」 など、話し合い活動の中で意識しながら活用する姿も見られた。

3 工夫考案型の話し合いにするための、視点を明確にした話し合い活動の工夫

学級目標や、自分たちに必要な力と関連付けて話し合い活動を展開した。

例えば、3年生の実践では、活動の目的である「学級がもっとなかよくなるため」ということが共有化され、話し合いの視点が明確になり、実践につながる具体的な「工夫考案型」の話し合いの実現につながった。また、抽象的な「なかよく」とい

う様子を、具体の姿としてイメージしやすくするために、自分の体験を出し合い、共有する活動を重視した。具体の姿を共有しておくことで、話し合い活動の中で視

点に沿った具体案が多く出された。

課題 主体的に話し合い活動を進め、よりよい合意形成を図るための司会グループの編成の工夫と指導の在り方

子どもたち主体の話し合い活動とするために、教師の介入の機会を少なくし、進行を子どもたちに委ねていく必要がある。そのために、これまで本校特活部では自分たちの話し合いを客観的に見つめる役割を司会グループの中に位置付けてきた。しかし、実際の話し合い活動の中で、その役割の機能を十分に果たすことができているとは言い難い。司会グループがそれぞれの役割を果たしながら進行し、自分たちで合意形成を図っていくために、どのような役割や分担が効果的であるのか、引き続き検討していきたい。また、フロアの子どもの考えを発言するだけでなく、教師が介入するように「今は〇〇に関してじっくり話し合うべきだ。」「話し合いの視点から逸れているの

で、立ち返って話し合っていこう。」など司会グループに対して進行に関する助言を行う

力を育てる必要がある。輪番で司会グループを経験していくからこそ、それまでの経験に基づいた司会グループへの助言を行えるであろう。司会グループの編成の工夫と併せて、話し合い活動を、学級全体で進行する土壌作りも欠かせない。子どもたちが主体的に話し合い活動を進め、よりよい合意形成を図るための指導の在り方を探っていきたい。

<次年度の体制>

部会長：附属の特別活動を担当する大学教員

副部会長：附属中学校特別活動の主任教員

書記：附属小学校特別活動の主任教員

令和元年度 部会活動報告書

部会名	情報教育（情報機器活用）	記入者名	村上 宙思（附属小学校）
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 6月の公開研究協議会において、4年C組が理科の授業提示として、問題解決に向けてのプログラミングの活動を提示した。各グループで一台ずつタブレットPCを使い、Scratchベースのプログラミングアプリケーションを用い、モーターカーの速度制御プログラムに取り組んだ。 またこの授業提示に先立ち、第4学年の3クラスでは理科「動物のからだのつくりと運動」の学習において、サーボモーターを駆動させてのシンプルな関節モデルの動きを、タブレットとプログラミングアプリを用いて学ぶ活動を経験している。 ・ 昨年末のWindows 7のサービス停止に伴う、OSのアップグレード作業に際しては、大学の成田堅悦統括技術長からの支援のもと、作業を進めることができた。 ・ 大学の林良雄先生からプログラミング活動に活用できるようにと、ミニコンピュータ「micro:bit」の供与を受けた。これにより6年生の理科（電気の利用）で、節電の必要性を理解する学習に活用することができた。 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ WindowsOS更新に関してはWindows 7から10へのアップグレードを実施した。しかしながらこれに伴い、本校メディアセンターのノートPC数台が更新に失敗し、現状ではオンラインで使用することができないでいる。現在、教員用の予備ノートPCをメディアセンターに配置し、児童の学習活動等に対応している。可能であるならタブレット端末のみならず、固定的なPC端末をせめて1クラスの児童が同時に使えるような環境整備を期待する。 ・ 高学年にタブレットが配備される予定を鑑み、学習活動におけるタブレットの有効活用の在り方を検討すると同時に、教科学習の枠内におけるプログラミング活動の教材開発・研究を進める。これはICT担当と各教科主任とで連絡をとりながら、年間指導計画内にタブレットを活用した学習活動やプログラミング活動を設定できる単元の位置づけを明らかにしていくようにしたい。 <p><次年度の体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ICT担当を中心として、プログラミング活動の本格実施に関し、支援態勢を固める。 低学年からコンピュータスキル定着に関するプログラムを提案したい。学校裁量の時間を中心に、タブレット機材やアプリケーションの基本操作の定着を図りたい。 			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	学校経営	記入者名	鎌 田 信 (所属 教育文化学部)
<p><今年度の実績></p> <p>○附属学校経営委員会を4回開催し、附属学校園全体に関わる事項を取り上げて協議を行った。4校園間の共通理解を図ることにもつながる、有意義な委員会の運営が出来た。</p> <p>○今年度から教育実践研究支援センターから教職高度化センターへ名称変更し、連携内容も一層密なものになった。宮城教育大学教職大学院生（現職教員）の研究授業が附属小学校を会場に実施されるなど、附属小学校を介して両大学の交流が深まるとともに、熱心な授業研究会が行なわれた。</p> <p>○附属学校運営全学協議会を開催し、大学と附属学校園全体に関わる諸事項を取り上げて協議を行った。特に、施設・設備や財政に関わる事項を協議し、改善を行った。</p> <p>○附属学校地域連携協議会を開催し、秋田県教委、秋田市教委、各校園学校評議員から附属学校園へのニーズを出していただき、今後の附属学校の運営全般について意見を伺うことが出来た。</p> <p>○附属学校子どもの人権委員会を開催し、附属学校園におけるいじめなど、子どもの人権をめぐる状況について、保護者代表も交えて協議した。今年度は加えて、スマートフォンの使用について取り上げられ議論がなされた。</p> <p>○附属学校園における教育実習の在り方について大学においてFDが開催された。4校園の副校長及び実習担当者が参加し、教育実習がより有意義なものになるための熱心な議論がされた。</p> <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>○第三期中期計画にしたがって、令和2年度の年度計画の作成・実施・評価を適切に行う。</p> <p>○附属学校園の教職員の働き方改革について、一層検討し取り組む必要がある。</p> <p>○コミュニティスクールに向けての検討が必要である。</p> <p>○附属学校園全体の中期計画期間にわたるビジョンに基づいた行動プランの実施と検証を行う。</p> <p>○授業改善、校種間連携等について4校園全体として取り組み、成果をあげることを目指す。</p>			

令和元年度 部会活動報告書

部会名	幼稚園	記入者名	山名裕子（所属：こども発達・特別支援講座）
-----	-----	------	-----------------------

<今年度の実績>

1. 附属教員の学部での授業

No.	授業名	実施日	担当者
1	教職入門	5月15日(水)	渡邊真紀
2	教育実習 事前事後指導	6月20日(木)	渡邊真紀・後藤笑美・白畑展子・今野文龍・村上美紀
		11月28日(木)	後藤笑美・白畑展子・今野文龍・村上美紀
3	こども発達援助論	12月12日(木)	中村知江子
		12月19日(木)	白畑展子

2. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

(1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録（大学教員の保育観察・記録 ～週1回程度）

① テーマ1：幼稚園教育課程の研究

(a) 自発的活動としての遊びを中心とした保育～子ども主体の生活と保育者～
(附属幼稚園研究テーマ)

(b) 幼児教育における計画概念の検討（奥山順子）

② テーマ2：幼児にとっての「集団」の意味（奥山順子）

③ テーマ3：幼児期の認知発達にふさわしい「学び」とは～幼児が遊びの中で学んでいること～
(山名裕子)

④ テーマ4：子ども自らがつくる安全な環境（瀬尾知子）

(2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り

① 日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築 参与観察・保育参加

② 大学における保育講座（秋田乳幼児保育研究会）への附属教員の参加（6回）

③ 大学教員からの研究情報の提供

- ・研究会報の発行 『秋田乳幼児研究会報 第12号, 2020年3月』の発行予定
- ・「研究会たより」の発行 No.80～85
- ・幼稚園教員向け保育情報「さくら通信」の発行 No. 57～101（奥山）
- ・研究誌「子どもの庭へー園丁の時間の中で」^と（奥山）

(3) 保育実践研究・保育カンファレンス（学部教員の研究保育・園内研究会等への参加）

No.	実施日	内容	参加者	備考
1	4月15日(月)	5歳児（そら組） 研究保育	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参観・研究会への参加
2	5月15日(水)	園内研修会	奥山順子	参観・研究会への参加
3	5月23日(木)	4歳児（ほし組） 研究保育	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参観・研究会への参加

No.	実施日	内 容	参加者	備 考
4	6月6日(木)	第1回公開研究協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	研究打ち合わせ
5	6月13日(木)	3歳児(はな組) 保育研究会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
6	6月27日(木)	公開研究会	奥山順子・山名裕子・ 瀬尾知子	参加・コメンテーター
7	8月6日(火)	保育研修会 幼児の主体の保育とは?～ 子ども理解と「評価」	奥山順子・山名裕子	研修会講師(園外からの参 加者もあり)
8	9月2日(月)	5歳児(そら組) 研究保育	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
9	9月26日(木)	遊びを語る会(もり組)	奥山順子	参加・研究会への参加
10	10月3日(木)	5歳児(そら組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
11	10月24日(木)	第2回公開研究協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子	研究会打ち合わせ
12	10月30日(水)	第2回公開研究協議会	奥山順子・山名裕子	参加・コメンテーター
13	11月19日(火)	3歳児(はな組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子	参加・研究会への参加

(4) 教育実習事後指導を通して

- ① 大学教員が事後指導において学生の保育記録をもとにしたカンファレンスを実施。
- ② 記録を練り直し、再考察をまとめたものを編集して冊子として作成。
- ③ 幼稚園教育実習の記録『たまご17号(2019年12月発行)』

3. 附属4校園の交流・参観

(1) 附属小学校

1年生と5歳児の交流(7月1日,2日, 10月15日,16日,17日,18日, 2月3日)

(2) 附属特別支援学校

- ① 高等部と5歳児のサツマイモ苗植え交流(5月13日)
- ② 高等部と5歳児のサツマイモ苗観察交流(6月21日)
- ③ 高等部と5歳児のリースづくり(12月2日)
- ④ 全児童生徒と全園児の「竿燈交流」(7月18日)
- ⑤ 小学部ふたば学級と交流(7月18日, 2月10日)
- ⑥ 小学部ふたば学級と全園児の「やきいもを食べよう」(10月10日)

4. 卒業研究の受け入れ

(1) 子どもの観察

- ① 友達とのかかわりにおける心の揺れ動き—4歳児の葛藤に着目して—(指導教員:山名裕子)
- ② 片付け行動における子どもの心的状況に着目した支援—4歳児の片づけ場面を中心に—(指導教員:小池孝範)

- ③ 幼児の他者理解に及ぼす影響—遊び場面と片付け場面に着目して—（指導教員：原義彦）
- ④ 5歳児のかかわりと遊び—遊びの広がりと深まりに着目して—（指導教員：山名裕子）
- ⑤ 幼児の論理的な思考の育ち—5歳児の遊び場面を中心に—（指導教員：奥山順子）

(2) 教員対象の質問紙調査

- ① 保育実践での手遊びに関する保育者の意識—「遊びの主体」を視点とする考察—（指導教員：奥山順子）

<次年度に向けた予定・課題等>

1. 大学教員の継続的な参与観察とそれを生かした研究推進

- (1) 昨年度同様に、学部・附属幼稚園が連携、協力しそれぞれの立場で研究を進め、その成果を幼稚園研究紀要、学会誌への投稿、学会発表によって地域等に発信する。
- (2) 双方の主体性が発揮できる対等な関係での共同研究体制の模索。

2. 附属教員の学部での授業

教職入門，教育実習事前事後指導，こども発達援助論

3. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

- (1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録
- (2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り
日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築
- (3) 学部教員の研究保育・園内研究会・保育カンファレンスへの参加
- (4) 教育実習事後指導を通しての学生指導

4. 大学教員の附属学校園の公開研究協議会などへの参加

- (1) 附属幼稚園で2回の公開研究協議会を実施予定
第2回目は保育以外の企画・運営（講演，シンポジウム等）を大学教員が担当
- (2) 公開保育の事前研究会への参加
- (3) 保育へのコメンテーターとしての参加

<次年度の体制>

部会長：山名 裕子

副部長：小玉 雅彦

書記：未定

令和元年度 部会活動報告書

部会名	中学校	記入者名	花 田 守
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 2回の公開授業 <ul style="list-style-type: none"> ① 公開研究協議会（5月31日（金） 参観者：約400名） ② 秋季授業研究会（11月8日（金） 参観者：35名） ○ 東北附連研究集会（10月31日（木）～11月1日（金）） ○ 研究内容の周知及び教育効果のエビデンス構築 <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究内容をDVD化し，上記公開授業の他に，校外で開催された各種研究会，校長会等で約100枚配付し，追跡調査を行った。1月現在，20数校からアンケートの返信があり，分析中。 ○ 働き方改革 <ul style="list-style-type: none"> ・ 残業時間縮小 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 3回の公開授業 <ul style="list-style-type: none"> ① 公開研究協議会（6月5日（金）） ② 総合学習研究発表会（10月16日（金）：初の公開） ③ 秋季授業研究会（11月7日（土）：教員免許証更新講習会を兼ねる） ○ 課題 <ul style="list-style-type: none"> ・ ICT教育環境の整備：GIGAスクール構想対応，授業実践例の蓄積 ・ 具体的なコミュニティスクール化の前進 ○ 働き方改革 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教育課程の見直し（部活動の在り方含む） ・ 計画年次，取得日数の増加推進 <p><次年度の体制></p>			

秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会要領

[制定] 平成24年10月4日

(目的)

第1条 秋田大学教育文化学部附属学校運営会議要項第8条に基づき、秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会（以下「専門委員会」という。）を置く。

(所掌事項)

第2条 専門委員会は、学部教員と附属学校園教員との共同・協力に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 学部・研究科の教育の充実に関すること
- (2) 附属学校園での共同研究及び共同授業に関すること
- (3) その他共同・協力に係る重要事項

(組織)

第3条 専門委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学部長が指名する評議員 1名
- (2) 附属教育実践研究支援センター長
- (3) 附属教育実践研究支援センターから推薦された教員 1名
- (4) 各附属学校園副校長
- (5) 第8条に定める各部会の部会長
- (6) 事務室長
- (7) その他委員長が必要と認めた者

(任期)

第4条 前条第3号及び第7号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第5条 専門委員会に委員長及び副委員長を置く。

2 委員長は、第3条第1号の委員をもって充てる。

3 副委員長は、委員長が指名する。

(議事)

第6条 専門委員会は、委員の過半数の出席がなければ開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は、委員長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第7条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者を出席させ、その意見を聴くことができる。

(部会)

第8条 部会は、教科別部会及び領域別部会とする。

2 教科別部会は、国語部会、社会部会、算数・数学部会、理科部会、音楽部会、図画工作・美術部会、体育・保健体育部会、技術部会、家庭部会、英語部会及び生活・総合部会とする。

- 3 領域別部会は、幼児・保育部会、特別支援部会及び教育指導部会とする。
- 4 英語部会には、外国語活動を含む。
- 5 生活・総合部会には、総合的な学習の時間の分野を含む。
- 6 教育指導部会には、道徳、特別活動、心理指導、生活・健康指導、学校経営、情報機器の活用の分野を含む。

(部会の構成員)

第9条 学部教員及び附属学校園教員は、一つ以上の部会に所属するものとし、複数の部会への所属を妨げない。

- 2 各附属学校園は、生活・総合部会に代表者各2名を選出する。ただし、幼稚園は1名とする。
- 3 幼稚園以外の附属学校は、幼児・保育部会に代表者1名以上を選出する。
- 4 特別支援学校以外の附属学校園は、特別支援部会に代表者1名以上を選出する。
- 5 各附属学校園は、教育指導部会に養護教諭を含む代表者3名以上を選出する。ただし、幼稚園は2名以上とする。

(部会の組織)

第10条 各部会は、互選により、次の各号に掲げる者を選出する。

- (1) 部会長 1名
 - (2) 副部会長 若干名
 - (3) 記録 1名
- 2 前項各号の者の任期は1年とし、再任を妨げない。
 - 3 欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(庶務)

第11条 専門委員会の庶務は、事務部において処理する。

(補則)

第12条 この要領に定めるもののほか、専門委員会の運営に関し必要な事項は、附属校運営会議が別に定める。

附 則

- 1 この要領は、平成24年10月4日から施行する。
- 2 この要領の施行後最初に委嘱される委員の任期は、第4条の規定にかかわらず、平成26年3月31日までとする。

秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会に関する申し合わせ

平成 22 年 7 月 8 日

一部改正 平成 25 年 10 月 1 日

- 1 会議の日常的な運営は、副議長が担当し、各部会との連絡調整、各部会の名簿作成及び報告書作成の調整などを行うものとする。
- 2 部会長と副部会長は、学部教員と附属学校園教員とで分担することが望ましい。
- 3 各部会は、年度当初に年度活動計画書を策定し、年度末に年度計画の実施状況等を年度活動実績報告書にまとめ、それぞれ運営委員会に提出する。
- 4 部会が作成する年度活動計画書及び年度活動実績報告書の記載内容には、次の項目を盛り込むことが望ましい。
 - ①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み
 - ②公開研究協議会などに向けた取り組み
 - ③共同研究や共同授業などの取り組み
 - ④学外の研究・研修団体などに関わる取り組み
 - ⑤部会の組織、運営になどに関する取り組み
 - ⑥その他の取り組み
- 5 副議長は、毎年度当初において、学部教員及び附属学校園教員に対し、部会所属の希望調査を行い、また、各部族学校園に代表者の選出を依頼し、部会の構成員を確定した後、名簿を作成する。
- 6 名簿には、部会構成員の氏名、所属、内線番号及びメールアドレスを掲載し、学部教員及び附属学校園教員全員に配布する。日常的な連絡はメールを活用する。
- 7 各附属学校園から選出されて部会に所属する附属学校園教員が、他の部会にも所属する場合には、選出された部会の活動を優先する。
- 8 専門委員会は、附属学校園教員の選出された部会での活動と他の部会での活動が当該教員の過度の負担とならないよう、可能な限り配慮する。
- 9 部会は、最低でも年度当初及び年度末に全体会を開催する。
- 10 会議は、最低でも年 1 回、全体会を開催する。

令和元年度附属学校学部共同委員会編集部

委員長 宇野 力 (英語・理数教育講座)

副委員長 田口 瑞穂 (英語・理数教育講座)

令和元年度 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会 実践報告書

発行 令和2年3月17日

編集 附属学校学部共同委員会編集部

発行者 秋田大学教育文化学部